

# 古往来の語彙について

——高山寺本古往来と垂髮往来との比較——

来 田 隆

## 目 次

- 一、はじめに
- 二、高山寺本古往来と垂髮往来について
- 三、異なり語数と延べ語数
- 四、品詞別語彙量
- 五、漢語と和語
- 六、共通語彙
- 七、おわりに

## 一、はじめに

古往来の語彙に関しては、石川謙博士が、教育史研究の立場から、さまざまな分野語彙について考察しておられるが、<sup>(1)</sup>国語史研究上からは、漢語語彙や敬語語彙が主に取り上げられてきた。しかし、その語彙の総体を対象とする研究となると、雲州往来に関する三保忠夫氏のものがあるのみで、<sup>(2)</sup>今後に残されている課題である。

古往来のみならず、和化漢文資料に関する語彙研究の立ち遅れは、使用される文字列（漢字）が、いかなる語形を表記しようと思図したものであるかを完全に把握することが容易でないことに起因する。その点で、古往来には、文範とし

ての教育的配慮からも、訓点を付する資料が少なくなく、和化漢文研究上の有力資料である。

言うまでもなく、古往来は消息文例集である。したがって、その表現内容は、書簡として、特定個人の読者を対象とし、事柄の伝達を意図するものであると同時に、文例集として、様々な用途に対応すべく、できるだけ異なる題材が取り上げられるものである。しかし、和化漢文という表現形式を用いる以上、その語彙構造は、和化漢文一般の語彙構造と一致するところも多いと考えられる。かかる観点から、本稿では二点の古往来を取り上げ、その語彙の構造を、(一)品詞別語彙量、(二)漢語と和語、(三)共通語彙の観点から、計量的方法によって、相互比較しつつ、両者の共通性に視点を置いて考察したいと思う。

## 二、高山寺本古往来と垂髮往来について

高山寺本古往来は、院政期に書写された、往来物の最古の形態の一を伝えるものであり、豊富な訓点を有する。本書の文献学的研究や国語史料としての価値については、『高山寺資料叢書』第二冊『高山寺本古往来 表白集』(昭和四七年)所載の築島裕博士、小林芳規博士、奥田勲氏等の所論に詳しいところである。本書には五十六通の書状が収められているが、いずれも、日付、差出人名、宛名を持たない。内容は、借用に関するもの、人事、犯罪に関するもの、音楽、雑芸に関するもの、興宴誘引に関するもの等、様々であって、実際にやりとりされた書状をもとに編纂されたものと考えられている。それゆえ、全体的統一には欠けるのであって、往来物としての古態を示すものである。編者は、真言宗僧の手に成るものかと推定されている。平安時代の成立ゆえ、丁寧語は「侍」専用である。

高山寺本古往来と比較対照すべく、鎌倉時代成立の垂髮往来を取り上げる。本書は、『国書総目録』に依れば、応安四年書写の尊経閣文庫蔵本のほか、尊経閣文庫本を転写した東大史料編纂所本と、江戸川乱歩蔵本が存する。尊経閣文庫本は、石川謙博士によって、翻刻されている(『日本教科書大系』第二巻 古往来(一)(昭和四二年))。本稿では、尊経閣文庫

本に依るが、原本未見で、紙焼写真に依る調査である。

本書は、全一九丁の冊子本で、外題は「垂髮往来」（題簽）、内題も「垂髮往来」とあり、本文は一面十行（二部九行）、十八丁裏に、本文と同筆で本奥書及び、書写識語がある。即ち、

奥書云 建長第五之曆沽洗下句之候久<sup>テ</sup>臥<sup>ニ</sup>病床<sup>ニ</sup>掩<sup>ニ</sup>学窓<sup>ニ</sup>雖<sup>ニ</sup>花落<sup>テ</sup>飯<sup>ル</sup>難惜風景携薬方鵠療纒<sup>ル</sup>扶露命閑適之中冷然之余為養<sup>□</sup>服之老情<sup>ノ</sup>據此穢之狂言怒<sup>以</sup>右筆可謂左道可<sup>及</sup>外<sup>ノ</sup>見者定招後嘲歎猶憚室内矧出闈外乎矣<sup>ノ</sup>尺門末愚宝」とあり、続けて、書写者の識語が次の如く記されている。

応安四年十一月八日以本院北谷都督<sup>ノ</sup>本書写了 権大僧都綱殿

これらの奥書識語から、本書は、「宝」なる僧が建長五（一二五三）年三月に撰じたものであり、その一写本たる「本院北谷都督本」を権大僧都綱殿が応安四（一三七二）年に書写したものであることが知られる。

撰者の「宝」なる僧の素性は未だ詳にし得ないが、書写者綱殿については、表紙裏右肩に「南都東南院綱殿僧都広橋兼綱御息所垂髮往来一冊」と記す貼紙が付され、また、内表紙左肩にも後筆で「東南院綱殿僧正」と記す貼紙がある。綱殿は「大谷本願寺通記」巻六の近江錦織寺歴世名位の記事によつて、その略歴が知られる。

第五世慈観 諱綱殿。童名光威丸。存覚第七子。建武元年二月七日生。康永二年九月入<sup>ニ</sup>随心院僧正経殿室。以<sup>ニ</sup>広橋大納言兼綱<sup>ニ</sup>為養父。十月十七日雑度。兼<sup>ニ</sup>取兼綱経殿一名。曰<sup>ニ</sup>綱殿。入<sup>ニ</sup>東大寺<sup>ニ</sup>修学。尋為<sup>ニ</sup>青蓮院門侶。至<sup>ニ</sup>山門法印権大僧都<sup>衛門督</sup>。就<sup>ニ</sup>師父存覚<sup>ニ</sup>学<sup>ニ</sup>究宗教。観応二年七月七日慈空下<sup>レ</sup>世。由<sup>ニ</sup>愚拙請。承<sup>ニ</sup>存覚命。赴<sup>ニ</sup>錦織寺<sup>ニ</sup>繼<sup>レ</sup>席。貞治二年三月廿五日從<sup>ニ</sup>存覚<sup>ニ</sup>受<sup>ニ</sup>六要鈔。永徳三年十一月廿八日著<sup>ニ</sup>宗門血脉譜。時五十歳。明徳三年五月十六日伝<sup>ニ</sup>六要鈔於本願寺善如<sup>ニ</sup>未<sup>レ</sup>詳<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>終。（大日本仏教全書）

東大寺で修学後、青蓮院門侶となり、山門法印権大僧都に至っている。書写識語の中の「本院」が指す処は、あるいは青蓮院であろうか。

本書は十二双、二十四通の書状から成る十二月往来型の往来物である。日付、差出人や宛名は記されてはいるけれども甚だ不完全であり、石川博士は「せいぜい模範文例を示すのが目標であつて、書札礼を教えようとする意図は、まだつよく織りこまれていなかったらう」と説かれてゐる(前掲書七七頁)。内容は、寺院における垂髪を中心とした、遊戯、娯楽、詩会、物見等の行事を扱つたものである。

本文には訓(仮名)、合符、字音語には詳細に声点(六声)を施す。これらの訓点は、本文と同筆(稀に後筆を混ずる)であつて、書写時に加點されたものと見られる。鎌倉時代の古往来の中では、成立年・書写年ともに明らかな古往来として、重視される資料である。丁寧語は、高山寺本古往来とは異なり、「候」専用である。

高山寺本古往来は、実際にやりとりされた書状をもとに編まれた、極めて実用的書簡文である。一方、垂髪往来は、寺院内の、しかも垂髪をめぐつての享樂的生活を題材とするもので、文章表現も技巧を凝した、文芸的文章で綴られてゐる。付された訓点も、院政期と南北朝期の隔たりがある。このような違いが用字及び訓読法の上に、どのように反映しているかをここで見ておきたい。高山寺本古往来の用字及び訓読法の特徴については、小林芳規博士の御論がある<sup>(3)</sup>ので、そこに指摘されている事象について、垂髪往来の場合を検討することとする。

まず、用字法を比較するに、和化漢文の用字法として、次の諸点で、高山寺本古往来と垂髪往来とは一致する。

(1)敬語の「被」「奉」「給」等が用いられる(以下、用例を掲げるに際しては、漢字に付された声点は省略する)。

○可<sup>キ</sup>相伴<sup>フ</sup>一歟<sup>ニ</sup>之由<sup>ヲ</sup>弥益殿内々被<sup>ル</sup>示<sup>シ</sup>遣<sup>サ</sup>。(7オ3)

○嚴命之旨跪以奉<sup>リ</sup>訖<sup>ヌ</sup>。(14ウ3)

○抑示給<sup>レ</sup>之旨殊以驚承候。(9オ7)

○秘鈔一卷謹<sup>テ</sup>返<sup>シ</sup>預<sup>リ</sup>候<sup>レ</sup>畢。(4ウ8)

(2)「然ル間」等の、接統語としての「間」が用いられる。

○然ル間有<sub>下</sub>脱<sub>ク</sub>烏<sub>ホ</sub>帽子<sub>シラ</sub>一之男<sub>ト</sub> (10オ8)

○難及子細一之間<sub>ニ</sub>愍<sub>ニ</sub>申領状一畢 (14オ3)

(3)使役には、単に「シム」とのみ訓じられる「令」が用いられる。

○垂髪已下若少之人々各飛<sub>ニ</sub>華軒<sub>ヲ</sub>一令<sub>レ</sub>向<sub>ニ</sub>桂河<sub>ニ</sub> (8オ8)

(4)陳述副詞とその呼応語の表記として、a「定…歟」、b「豈…哉」、c「若…者」の形式が用いられる。

a「定…歟」は、全八例がこの形である。

○若有<sub>ニ</sub>楚忽之会一者<sub>ニ</sub>定<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>周章之思<sub>ヲ</sub>一歟 (1ウ3)

b「豈…哉」は、三例のうち、二例は、

○豈非<sub>ニ</sub>閑闈之素懷<sub>ニ</sub>哉 (3ウ4)

○豈非<sub>ニ</sub>自宗之碩徳<sub>ニ</sub>乎 (4ウ3)

の形式で、呼応語を漢字表記しない例は一例である。

○豈加<sub>ヘ</sub>ん<sub>ヤ</sub>愚淺之詞<sub>一</sub> (5ウ1)

c「若…者」に関しては、「若…及<sub>ハ</sub>」、「若…可<sub>シ</sub>」、「若…者」(二例)とする例もあるが、七例中四例は、「若…者」の形式である。

○若<sub>シ</sub>接<sub>ニ</sub>綺席<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>定<sub>テ</sub>類<sub>ニ</sub>瓦礫<sub>ニ</sub>歟 (6ウ6)

○若<sub>シ</sub>致<sub>ニ</sub>不慮之鼻惡<sub>一</sub>者<sub>ニ</sub>定<sub>テ</sub>為<sub>ニ</sub>驚<sub>レ</sub>目之狼籍<sub>一</sub>歟 (14オ7)

垂髪往来では、右の如く七例中五例までが「若…者(バ)、定…歟」の形になっており、表現形式の類型化が認められる。

高山寺本古往来と用字法上の相違を見せるのは、(4)の内の、「縦」<sub>ヅトヒ</sub>とその呼応語の表記についてである。高山寺本古

往来では、「縦」は逆接条件句を導き、かつ、既定には「雖」を、仮定には「云」を呼応させ、呼応語の漢字も區別するが、垂髮往来では、九例全てが、「縦……トモ」と仮定条件句のみを導くのであって、その読み添えも漢字表記しない。

○縦ヒ蒙ルトモ 垂髮之芳命ヲ 争カ 励マサン ニ 弊身之微力(16ウ9)  
ストモ 文学之勤ヲ 何ソ 同カラン 管見之才ニ (5オ5)

右のような小異はあるけれども、用字法上は、基本的に高山寺本古往来によく通ずるものである。

一方、訓読法に関しては、高山寺本古往来と相違するところがある。平安中期以降の固定した新しい訓法として、高山寺本古往来では、

(1) 再読字は「未」の訓を示す。

(2) 「畢」を「ヲハヌ」と訓ずる。

(3) 「勿」を「ナカレ」と訓ずる。

(4) 「而已」を「ナラクノミ」と訓ずる。

(5) 「言」「只」は呼応語を読み添えない。

垂髮往来も(1)～(3)は高山寺本古往来と同様である。(4)は、

○委セシ 趣シ 悉シ 之ヲ 而已(18オ8)

の一例のみで、訓不明である。

(5)の「只」は、垂髮往来でも、

○一フセリ 生キ 只ニ 臥ニ 空ニ 床ニ (17ウ2)

の如く、呼応語を読み添えないのが原則で、例外的に、

○只ヘ 以カ 衆ラ 一ツ 宜ク 加ヘ 諫カ 言ク 一ツ 耳(13ウ10)

が一例存するのみである。しかし、「言」の呼応語は相違する。垂髪往来では、すべて、「曰(云)……ト云々」という形式である。

○或人語<sup>テ</sup> 日<sup>ク</sup> 彼河辺<sup>ニ</sup> 毎年<sup>ニ</sup> 一度心有<sup>ニ</sup> 不祥<sup>ノ</sup> 事<sup>一</sup> 云々<sup>ト</sup> (9オ8)

○然間<sup>少</sup> 人被<sup>レ</sup> 命云<sup>ク</sup> (略) 何休<sup>セント</sup> 地慮<sup>之</sup> 恨<sup>一</sup> 云々<sup>ト</sup> (15ウ3)

これは高山寺本古往来にも存する形式であるが、その場合でも「ト」は読み添えられていない。

○在俗<sup>ノ</sup> 云<sup>ハ</sup> 六月<sup>ハ</sup> 名<sup>ツ</sup> 越<sup>ク</sup> 祓<sup>ハ</sup> ハ<sup>ラ</sup> ヘ<sup>ト</sup> 云々<sup>ト</sup> (360)

和化漢文訓点資料特有の訓法として、高山寺本古往来では、

(7)「況」の結びに所定訓を呼応させない。

(8)助字「者」が存する。

(9)「也」「歟」「哉」等の文末助字に所定訓が定着している。

右三項のうち、(7)は垂髪往来と一致する。

○況<sup>ヤ</sup> 於<sup>テ</sup> 得<sup>ル</sup> 骨<sup>ヲ</sup> 之<sup>ニ</sup> 輩<sup>ニ</sup> 覓<sup>モ</sup> 死<sup>シ</sup> 閣<sup>ク</sup> 手<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヒ</sup> 隙<sup>マ</sup> 一 (1オ6)

(8)は、その用例が無い。(9)に関しては、「也」「歟」には付訓例が無く、不読か否か確かでないけれども、「哉」は不読で

あって、高山寺本古往来と異なる。

○恐<sup>ハ</sup> 似<sup>タル</sup> 年少<sup>之</sup> 案<sup>処</sup> 一 哉<sup>ニ</sup> (10ウ8)

○此<sup>ノ</sup> 条何様<sup>ニ</sup> 可<sup>レ</sup> 存哉<sup>ヘ</sup> (17ウ6)

漢籍の訓詁法とは異なり、天台宗・真言宗の仏書訓詁法に共通する訓法として、高山寺本古往来では、

(9)文末助字「之」を「コレ」と訓ずる。

(10)「欲」は「ス」の外は、「オモフ」と訓じ、「ホツス」の訓は見られない。

(11) 「悉」は「コトゴトク」、「漸」は「ヤウヤク」と訓じ、漢籍訓読法の特徴たる「コトゴトクニ」、「ヤウヤクニ」は全く用いない。

(12) 「則」字を「スナハチ」と訓ずる。

右四項のうち、(9)(10)の二項は、垂髮往来と一致する。

(9) 〇少人ノ事日来旨承<sub>ニ</sub>及之<sub>一</sub> (4ウ10)

(10) 「ス」と訓ずる例、

〇改年之後代<sub>ニ</sub>对人<sub>一</sub>欲<sub>レ</sub>獻<sub>ニ</sub>祝<sub>ニ</sub>之處<sub>ニ</sub> (1ウ8)

「オモフ」と訓ずる例、

〇縦<sub>ニ</sub>招<sub>ニ</sub>守<sub>ニ</sub>株<sub>ニ</sub>株<sub>ニ</sub>キセラ<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>嘲<sub>ニ</sub>欲<sub>ニ</sub>積<sub>ニ</sub>善根之功<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>故也 (11オ3)

なお、(9)(10)に関連するものに、「於」の訓法がある。場所を表わす語の上に置かれる「於」字を「ニシテ」と訓ずるのは、仏書の訓読法であるが、垂髮往来に、この訓法がある。

〇俄<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>庭樹之下<sub>ニ</sub>始<sub>ニ</sub>蹴鞠之会<sub>ニ</sub> (2ウ7)

〇於<sub>ニ</sub>八<sub>ニ</sub>幡<sub>ニ</sub>宮<sub>ニ</sub>寺<sub>ニ</sub>可<sub>ニ</sub>シ<sub>ニ</sub>供養大般若<sub>ニ</sub> (5ウ9)

(11)は高山寺本古往来と相違する。

〇一日之壯觀四万悉<sub>ク</sub>称美 (7ウ1)

〇遊覽及<sub>レ</sub>暮<sub>ニ</sub>之間漸<sub>ク</sub>欲<sub>レ</sub>南<sub>ニ</sub>轅<sub>ニ</sub>之處<sub>ニ</sub> (11ウ6)

の如く訓ずる一方で、漢籍の訓法たる「ヤウヤクニ」の訓も存する。

〇日新之才<sub>ニ</sub>徐<sub>ニ</sub>尽<sub>ニ</sub> (4オ10)

〇即勸<sub>ニ</sub>三遲<sub>ニ</sub>漸<sub>ニ</sub>及<sub>ニ</sub>一醉<sub>ニ</sub> (15ウ5)



(12) 「則」字は、「スナハチ」と訓じた例が存しない。例えば、次の如くである。

○流長<sup>ウツノハ</sup> 則難<sup>レ</sup> 竭<sup>キ</sup> 根深<sup>リノハ</sup> 則難<sup>レ</sup> 朽<sup>シ</sup> (5才2)

右二項から、垂髪往来では仏書の訓法の中に漢籍の訓法を混じていることが知られるのである。

以上、用字法と訓読法から二古往来を比較するに、用字法上は両者よく通ずるが、訓読法に於ては相違するところがあるのである。垂髪往来の訓点、編者の意図する訓読と一致するものか否かは、古往来を始めとする鎌倉時代の和化漢文訓点資料の調査を必要としよう。それは今後の課題として、本稿では、成立時期や表現内容及び訓読法に於いて異なる二古往来を比較することによつて、これらの相違点を越えた古往来としての語彙構造の共通面を明らかにすることを当面の目的とする。

調査にあたっては、高山寺本古往来は、前掲『高山寺資料叢書』所収の、小林芳規博士編総索引を、垂髪往来は、山下日登美氏作成の「垂髪往来総索引(稿)」の恩恵を蒙った。

### 三、異なり語数と延べ語数

語の認定や語数の算出にあたっては、次の方針に従った。

(1) 複合語は、その構成要素に分けないで、一語として数えた。但し、「来月五日」の如き類は、「来月」と「五日」の二語に分けた。

(2) 本動詞と補助動詞とを区別せず、動詞に一括した。

(3) 形容動詞か副詞かの区別が紛わしい語は、二古往来のいずれも連用法のみの場合は副詞に、いずれか一方に連用法以外の例があれば形容動詞とした。ために、高山寺本古往来の総索引での取り扱いと異なる語が若干ある。例えば、「タシカナリ(慥)」、「アナガチナリ(強)」、「ナマジヒナリ(愍)」、「ワヅカナリ(纒)」等は、連用法のみであるから

副詞とし、「シキリニ(頻)」は垂髪往來に終止法が存するゆえ、形容動詞として取り扱っている。

(4)「シカルベシ」、「カクノゴトシ」、「シカノゴトシ」は、便宜的に形容詞に収めた。また、「ナカレ(勿)」を「ナシ」と区別して一語として数えた。

(5)和語と漢語との複合語は和語とし、漢語を語幹とするサ変動詞や形容動詞は一語の漢語とした。垂髪往來では、漢語には詳細に声点が付されているので、無訓の場合は、声点の有無を拠り所として、和語と漢語との判別をした。(6)別訓や義注は除外した。

なお、垂髪往來については、未だ解釈しきれない部分があり、複合語の認定や和語と漢語との判別等について、今後修正の可能性を若干残していることをお断りしておきたい。通例に従い、助詞・助動詞は除外して考察する。

まず、高山寺本古往來と垂髪往來とは、それぞれ、どの程度の語数で構成されているかを見るに、異なり語数、延べ語数は次の通りである。

高山寺本古往來

延べ語数 三八〇一語

異なり語数 一六二一語

垂髪往來

延べ語数 三一九〇語

異なり語数 一七一〇語

延べ語数は高山寺本古往來の方が垂髪往來の約一・二倍であるが、異なり語数では逆に垂髪往來の方が多い。一語当りの使用頻度は、高山寺本古往來が二・三回、垂髪往來が一・九回となり、共に低い値を示す。

一般に、延べ語数が多くなれば、異なり語数も増加しようが、三保氏の示されたデータに依ると、雲州往來の場合も、

延べ語数は一二二五七語と高山寺本古往来の約三倍に達するのに、異なり語数は三八一六語（氏の第二次調査の数）に止まり、一語当たりの使用頻度は二・九回である。氏は、和文系文学作品に比して、雲州往来は同一語の反復使用が少ないことを指摘されたが、このことは、古往来は模範文例集として編まれるものゆえ、同じ題材は、原則的には繰り返し取り上げられることは無いという、古往来の文章の特性が然らしめるものと考えられる。

#### 四、品詞別語彙量

三で見たと異なり語数、延べ語数を品詞で分け、それぞれの比率を示すと表Iになる。

この表から、次の事が知られる。

(一) 品詞別の比率は、両者とも、名詞が最も高く、動詞がそれに次ぐ。二品詞を合わせると、異なり語数では、高山寺本古往来が九〇%、垂髪往来が、九一%、延べ語数では、それぞれ、八〇%、八一%を占める。

(二) (一)以外の品詞は、異なり語数で見ると、一桁の数値で、就中、連体詞・接続詞・感動詞は極めて低率である。しかし、副詞は、異なり語数・延べ語数のいずれでも、形容詞と形容動詞を合わせた数値よりも高い比率を示すことが注目される。

(三) 連体詞・接続詞・感動詞を別にして、比率の高いものから低いものへの順に並べると、延べ語数では、二古往来とも、名詞・動詞・副詞・形容詞・形容動詞の順位で、かつ、それぞれの比率の値も両者で近似する。異なり語数の場合も、両者は、名詞・動詞・副詞・形容動詞・形容詞の順位で一致する。

右のように、品詞別語彙量の比率から見ると、延べ語数・異なり語数いずれに於いても高山寺本古往来と垂髪往来とはよく一致するのであって、両者は語彙構造を等しくするものであることが知られる。なお、形容詞と形容動詞との順位が、延べ語数と異なり語数とで逆になっているのは、形容詞「ナシ（無）」一語の使用頻度が群を抜いて高いためであ

注、( )は%。

表 I

品詞	高山寺本古往来		垂髪往来	
	異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数
名詞	1,068(65.9)	2,023(53.2)	1,204(70.4)	1,830(57.4)
動詞	387(23.9)	1,024(27.0)	354(20.7)	760(23.8)
形容詞	32( 2.0)	150( 4.0)	26( 1.5)	105( 3.3)
形容動詞	37( 2.3)	57( 1.5)	29( 1.7)	45( 1.4)
副詞	74( 4.6)	364( 9.6)	84( 4.9)	342(10.7)
連体詞	11( 0.7)	94( 2.5)	6( 0.4)	65( 2.0)
接続詞	12( 0.7)	89( 2.3)	6( 0.4)	42( 1.3)
感動詞	0	0	1( 0.1)	1( 0.0)
計	1,621(100.1)	3,801(100.1)	1,710(100.1)	3,190(99.9)

る。

ここで、他の文献に於ける品詞別語彙量の比率と比較してみたい。和化漢文と最も深い関係にある訓点資料については、築島裕博士の示された、大慈恩寺三蔵法師伝古点のデータ<sup>(5)</sup>を、和文系資料としては、宮島達夫氏編『古典対照語い表』付載の「品詞別統計」から、ジャンル別に四点の作品のデータを借用し、説話作品として、山内洋一郎氏編『古本説話集総索引』（昭和四四年）の付表を加えて、併せて六点の文献と比較する。これらの諸研究での語の認定基準と、本稿でのそれとは相違する点もあり、厳密な比較は難しいところであるが、大よその傾向は知り得ようと考ええる。

繁雑を避けて、品詞毎の比率のみで、表示すると表IIになる。なお、慈恩伝古点では、連体詞は副詞に含めて算出されている。

作品のジャンルと品詞別語彙量の比率との相関性は、異なり語数よりも延べ語数に於いて、より明瞭に示されようから、まず、延べ語数での比率から見る。二古往来では、比率の高い品詞から並べると、名詞・動詞・副詞・形容詞・形容動詞・その他の順位である。これと一致するものは、慈恩伝古点と蜻蛉日記・古本説話集である。そして、次の諸点で、慈恩伝古点と古往来がよく一致する。

①名詞の比率は、二古往来が最も高く、韻文の後撰集を除けば慈

表II

文献 品詞		徒	古	蜻	源	後	慈	高	垂
		然	本	蛉	氏	撰	恩	山	髮
		草	説	日	物	集	伝	寺	往
		集	話	記	語		古	本	来
			集				点	古	来
								往	来
								来	
異 な り 語 数	名 詞	59.1	51.7	47.1	42.5	53.2	73.8	65.9	70.4
	動 詞	29.4	33.7	38.2	44.6	34.9	18.7	23.9	20.7
	形 容 詞	4.9	5.3	5.8	5.3	5.0	0.8	2.0	1.5
	形容動詞	3.2	2.8	4.9	5.1	2.1	4.7	2.3	1.7
	副 詞	2.8	5.3	3.2	1.9	3.7	1.7	4.6	4.9
	連体詞	0.2	0.4	0.2	0.1	0.3		0.7	0.4
	接続詞	0.2	0.4	0.1	0.1	0.1	0.2	0.7	0.4
	感動詞	0.1	0.3	0.2	0.2	0.2	0.0		0.1
	その他	0.1		0.2	0.2	0.5	0.1		
	総 数	4,242	2,966	3,598	11,423	1,923	11,694	1,621	1,710
延 べ 語 数	名 詞	49.5	42.9	40.7	41.6	50.9	49.7	53.2	57.4
	動 詞	32.5	36.9	38.1	32.9	36.3	31.6	27.0	23.8
	形 容 詞	8.3	7.3	7.9	10.9	6.9	3.1	4.0	3.3
	形容動詞	2.8	1.8	3.0	4.3	1.1	2.4	1.5	1.4
	副 詞	4.6	7.4	8.3	8.3	2.7	11.3	9.6	10.7
	連体詞	2.1	2.6	1.3	1.6	1.4		2.5	2.0
	接続詞	0.1	0.8	0.3	0.1	0.0	0.9	2.3	1.3
	感動詞	0.1	0.2	0.3	0.2	0.1	0.0		0.0
	その他	0.1		0.0	0.1	0.4	1.0		
	総 数	17,114	12,934	22,398	207,808	11,955	48,405	3,801	3,190

恩伝古点がこれに次ぐ。

② 動詞の比率は、二古往来が最も低く、それに次ぐのは慈恩伝古点である。

③ 形容詞の比率は、慈恩伝古点が最も低く、それに次ぐのは二古往来である。

④ 副詞の比率は慈恩伝古点が最も高く、それに次ぐのは二古往来である。慈恩伝古点の場合、連体詞が含まれているが、それを考慮しても、この高率は変わるまい。

異なり語数と延べ語数とは必しも並行してない。二古往来では、異なり語数で高い比率を占める品詞は、名詞・動詞・副詞・形容動詞・形容詞・その他の順位であるが、これと全く一致する文献は無い。しかし、この場合も、二古往来と慈恩伝古点とは、次の点で相通する。

① 名詞の比率は、慈恩伝古点が最も高いが、二古往来はそれに次ぐ。

② 動詞及び形容詞の比率は、慈恩伝が最も低く、二古往来はそれに次ぐ。

ただし、形容動詞と副詞の場合、慈恩伝古点と古往来とは様相を異にしている。形容動詞は、韻文の後撰集が最も低率を示し、これを除くと、二古往来が低いのであるが、慈恩伝古点は源氏物語・蜻蛉日記に次いで高い。また、副詞は古往来が最も高いのに対して、慈恩伝古点は最も低いという相違を示す。しかし、後に述べるように慈恩伝古点に用いられる形容動詞は、その九二%までが一語当りの使用頻度の低い漢語で占められているのであって、それゆえ、異なり語数の比率が高くなっているのである。慈恩伝古点で副詞が一・七%と低いのは、源氏物語でも一・九%に止まっていることから明らかのように、総語数が極めて多いものゆえに、相対的に低い値になっていると解されるのである。

要するに、二古往来の品詞別語彙量は、和文系資料とは異なり、名詞・副詞の占める率が高く、動詞は低く、形容詞・形容動詞は極めて貧弱なものであると言える。そして、この特徴は、訓点資料に近いものである。

品詞別語彙量の比率と古典作品のジャンルとの関連について、大野晋博士は、(a)万葉集、(b)随筆グループ、(c)日記グ

ループ、(d)物語グループに分けると、名詞、即ち表現素材を担う語の比率が、(a)から(d)の順に減少し、形容詞・動詞即ち、描写叙述に関与する語の比率は、逆に(a)から(d)の順に増大すること、形容動詞は中古女流文学作品に多いこと、その他の類の語は、各作品の大小に関わりなく、一定した比率を保つという相関性が存することを指摘された。<sup>6)</sup>博士の示された第八表に当てはめると、古往来は万葉集より更に左に位置することになる。素材の面で多様さを示す反面、叙述の形式は類型的で単純なものと言うことができる。

古往来では、名詞の比率が高く動詞の比率が相対的に低いのは、後に述べるが、漢語の多用及びその用法にも由来する。即ち、漢語の多くは二字の漢字で構成されるものであるが、古往来では、一般にはサ変動詞あるいは形容動詞として用い得る文脈であっても、名詞形で用いがちであるという傾向が認められるのである。

形容詞・形容動詞が低率であるのは、和化漢文体という、構文上及び表記上の制約が大きく係わっているであろう。その一方で、副詞が多用されているのは、この叙述描写の面での単純さを補うものと言える。即ち、古往来の文表現形式では、述語の前に副詞を置く度合は非常に高く、垂髪往来では殊に著しいところである。

## 五、漢語と和語

和化漢文資料の語彙の最も著しい特徴は、漢語の占める割合の高いことであろう。古往来でも、漢語使用は盛んである。

高山寺本古往来と垂髪往来に用いられている語を、漢語と和語とに分け、それを雲州往来、慈恩伝古点と対比すると、表IIIになる。

漢語の占める比率を異なり語数から見ると、文献によつて相異を示す。即ち、高山寺本古往来で五一%、垂髪往来で六三%、雲州往来で六八%であるが、慈恩伝古点では、八六%の高率を示すのである。しかし、漢語の一語当りの使用

頻度は、和語に比して大變低く（慈恩伝古点ですら、二・一回）、延べ語数を見ると、高山寺本古往来で三四%、垂髪往来で四四%、雲州往来でも四二%であり、最も語彙量の多い慈恩伝古点でも四三%に止まっている。四文献ともに、延べ語数での漢語の比率が四割前後程度に止まるといふのは興味深い事実である。漢語を多用するこれらの文献にあつても、和語が用語の根幹をなしていることが知られる。

表III

		異なり語数	延べ語数	一語当り 使用度
高山寺	和語	797( 49.2)	2,513( 66.1)	3.2
	漢語	824( 50.8)	1,288( 33.9)	1.6
	計	1,621(100.0)	3,801(100.0)	2.3
垂髪	和語	641( 37.5)	1,778( 55.8)	2.8
	漢語	1,069( 62.5)	1,411( 44.2)	1.3
	計	1,710(100.0)	3,189(100.0)	1.9
雲州	和語	1,241( 32.5)	6,571( 58.4)	5.3
	漢語	2,575( 67.5)	4,686( 41.6)	1.8
	計	3,816(100)	11,257(100)	2.9
慈恩伝	和語	1,657( 14.2)	27,406( 56.6)	16.5
	漢語	10,037( 85.8)	20,989( 43.4)	2.1
	計	11,694(100)	48,405(100)	4.1

注、( )は%。

次に、品詞別での漢語の占める比率をまとめると表

IVになる（雲州往来はデータが無いので省く）。

漢語が用いられる品詞は、名詞・動詞・形容動詞・

副詞であるが、二古往来に用いられている漢語副詞は、

次の諸語である。

高山寺本古往来 自然ニ 少々

垂髪往来 暗ニ 一向ニ 一時ニ

二 少々 内々 必々 密々

副詞を除く三品詞での漢語の占める比率は、三文献共に異なり語数、延べ語数のいずれの場合も、名詞が最も高く、形容動詞がそれに次ぎ、動詞は最も低い。動詞は、古往来では、異なり語数で二〇%台、延べ語数で一〇%台であつて、漢語の占める比率の高い慈恩伝古点でも、異なり語数では六四%であるが、延べ語



表IV

品詞 \ 語数		和 語		漢 語		漢語の占める 比 率	
		異なり 語 数	延 べ 語 数	異なり 語 数	延 べ 語 数	異	延
高山寺本古往来	名 詞	342	892	726	1,131	68.0	55.9
	動 詞	309	892	78	132	20.1	12.9
	形容動詞	19	35	18	22	48.6	38.6
	副 詞	72	361	2	3	2.7	0.8
	そ の 他	55	333	—	—	—	—
	計	797	2,513	824	1,288	50.8	33.9
垂髪往来	名 詞	246	563	958	1,267	79.6	69.2
	動 詞	266	646	87	113	24.6	14.9
	形容動詞	12	27	17	18	58.6	40
	副 詞	77	329	7	13	8.3	3.8
	そ の 他	40	213	—	—	—	—
	計	641	1,778	1,069	1,411	62.5	44.2
慈恩伝古点	名 詞	495	6,812	8,139	17,238	94.2	71.7
	動 詞	786	12,170	1,397	3,141	64.0	20.5
	形容動詞	53	529	501	610	92.1	53.6
	そ の 他	323	7,905	—	—	—	—
	計	1,657	27,416	10,037	20,989	85.8	43.3

数では二一％に過ぎない。漢語は、主に名詞・形容動詞として用いられ、叙述の中核をなす動詞は、かかる文献に於いても、主に和語が用いられているのである。

動詞に占める漢語の比率は、慈恩伝古点に比して二古往来では低いのであるが、これは、古往来に於ける漢語の用法が、その一因を成しているよう。即ち、小林芳規博士が高山寺本古往来の漢語の用法で指摘された、漢語名詞の「動詞的用法」である。高山寺本古往来では、

(1) 但例<sup>レイキウ</sup>供給<sup>ト</sup>之事<sup>ト</sup>今年<sup>ナカク</sup>永<sup>チヤウシ</sup>以停<sup>シ</sup>止<sup>シ</sup>(120)

の如く、一般にはサ変動詞として用いる漢語を、名詞形のまま述語とする用法や、

(2) 抑当郡<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>亡<sup>ハク</sup>弊<sup>ノ</sup>之由<sup>ニ</sup> (120)

の如く、述語以外でも、連体形に「スル」を用いず、「ノ」を介して名詞形のまま用いる例、更には、

(3) 干<sup>ニ</sup>今<sup>イマ</sup>猶<sup>チ</sup>遅<sup>チ</sup>々<sup>チ</sup>尤<sup>シ</sup>可<sup>ク</sup>辱<sup>ハツ</sup>宿業<sup>ヲ</sup> (64)

の如く、情態性の意を有する漢語を、「ナリ」「タリ」を付けて形容動詞化することなく、名詞形のまま用いる例が見られる。このような漢語の用法は、他の和化漢文資料にも存することを博士は指摘していられるが、垂髮往来にも、

(1) 意<sup>ヨモスカラ</sup>夜<sup>ナ</sup>同向<sup>ナシ</sup>レ<sup>ト</sup> 暁<sup>ニ</sup>皈<sup>キ</sup>歎<sup>コト</sup> (3オ5)

(2) 祇<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>垂髮<sup>ノ</sup>之中<sup>ニ</sup>能<sup>ク</sup>堪<sup>タル</sup>ニ<sup>シ</sup> 其<sup>ノ</sup>骨<sup>ニ</sup>之輩<sup>ノ</sup>候歎<sup>ノ</sup>之由<sup>ニ</sup> (6オ6)

(3) 魂<sup>レ</sup>猶<sup>チ</sup>恍<sup>チ</sup>忽<sup>チ</sup>心<sup>ニ</sup>只<sup>レ</sup>憫<sup>シ</sup>然<sup>シ</sup> (10ウ1)

のように、文構造上、サ変動詞あるいは形容動詞とし得る漢語を、名詞形のままとする例は少なくない。

## 六、共通語彙

高山寺本古往来と垂髮往来とは、品詞別語彙量や漢語の使用状況に於いて、語彙構造がよく一致することを見てきた。

では、どの程度の語が共通に使用されているであろうか。

共通使用語は、次に共通語彙一覧として具体的に挙げた三七七語である。成立時期や内容上に相違のある二古往来の共通語彙は、往来物の基本語彙という性格を持つものであろう。

〔共通語彙一覧〕

(注) (1) 共通語彙の認定では、接頭辞「御」の有無は無視し、「コトゴトク」と「ゴトトクニ」、「サイトコロ」と「サイトコロ」等は、一語の異形として一括した。

(2) 表記の漢字の下に用例数を示した。上の数が高山寺本古往来、下の○で囲んだ数が垂髪往来である。

(一) 名詞 一六七語

○和語 七九語

- あき(秋<sup>5</sup>) あし(足<sup>2</sup>) あたり(邊<sup>5</sup>) あひだ(間<sup>29</sup>、際<sup>9</sup>) いたり(至<sup>3</sup>) いとま(暇<sup>1</sup>、違<sup>1</sup>) いま(今<sup>18</sup>) いろ(色<sup>4</sup>) うち(内<sup>3</sup>、中<sup>2</sup>) うへ(上<sup>6</sup>) うらみ(恨<sup>1</sup>) おそれ(恐<sup>2</sup>、悚<sup>1</sup>、怖<sup>1</sup>) おもて(面<sup>2</sup>) おもひ(思<sup>2</sup>) おもぶ(趣<sup>1</sup>) かぎり(限<sup>1</sup>) かぜ(風<sup>2</sup>) かも(加茂<sup>2</sup>) きこえ(聞<sup>2</sup>) くだん(件<sup>14</sup>) くちびる(唇<sup>1</sup>) くるま(車<sup>1</sup>) こころ(心<sup>5</sup>、意<sup>1</sup>、情<sup>1</sup>) こころざし(志<sup>10</sup>) こと(事<sup>46</sup>) 緯<sup>2</sup> ことば(詞<sup>2</sup>) これ(之<sup>19</sup>、是<sup>24</sup>、斯<sup>1</sup>、此<sup>1</sup>、旃<sup>2</sup>、惟<sup>3</sup>) こゑ(声<sup>2</sup>) さいつころ(近<sup>1</sup>、曾<sup>1</sup>) 近<sup>1</sup> 曾<sup>1</sup> さいはひ(幸<sup>2</sup>) さかひ(境<sup>1</sup>) すまひ(相撲<sup>2</sup>、相撲<sup>2</sup>) そと(外<sup>1</sup>) たぐひ(類<sup>1</sup>、属<sup>1</sup>) たみ(民<sup>1</sup>) ため(為<sup>21</sup>) ちから(力<sup>3</sup>) ちぎり(契<sup>2</sup>) ついで(次<sup>2</sup>) つかひ(使<sup>4</sup>) つぎ(月<sup>2</sup>) つみ(罪<sup>2</sup>) とが(咎<sup>1</sup>、過<sup>1</sup>) とき(時<sup>5</sup>) ところ(所<sup>47</sup>、處<sup>8</sup>) とし(年<sup>6</sup>) とのぼら(殿原<sup>1</sup>) ともがら(輩<sup>3</sup>) 倫<sup>1</sup>、徒<sup>1</sup>) なか(中<sup>8</sup>) のち(後<sup>10</sup>) はかりごと(謀<sup>1</sup>、計<sup>4</sup>) はし(端<sup>1</sup>) はじめ(首<sup>1</sup>、始<sup>5</sup>、取<sup>1</sup>) はぢ(恥<sup>1</sup>) はな(花<sup>4</sup>) ばば(馬庭<sup>1</sup>、馬場<sup>1</sup>) はばかり(憚<sup>1</sup>) ひ(日<sup>10</sup>) ひごろ(日来

古往来の語彙について

2②、日者<sup>2</sup>、日比者<sup>1</sup> ひとり(左<sup>1</sup>②) ひと(人<sup>11</sup>②) ひとひと(人々<sup>5</sup>④) ふえ(笛<sup>2</sup>①) ふくろ(囊<sup>1</sup>①) ま  
 ひ(舞<sup>1</sup>①) まへ(前<sup>1</sup>①) みぎ(右<sup>3</sup>②) みち(道<sup>1</sup>①、路<sup>1</sup>①) むかし(昔<sup>1</sup>①、曠昔<sup>1</sup>①) むね(旨<sup>9</sup>⑤) もと(本  
 4、下<sup>3</sup>③、基<sup>1</sup>①) もの(者<sup>11</sup>③、物<sup>3</sup>④) やま(山<sup>2</sup>①) ゆゑ(由<sup>1</sup>、故<sup>6</sup>) よし(由<sup>34</sup>④) よはひ(齢<sup>2</sup>②) よる(夜  
 4①) よろこび(悦<sup>2</sup>②) をのこ(男<sup>5</sup>⑤)  
 ○漢語 八八語

あんない(案内<sup>3</sup>②) いち(一<sup>1</sup>①) いちじつ(一日<sup>2</sup>②) いちにん(二人<sup>3</sup>①) いちりやう(一兩<sup>4</sup>①) いつしやう  
 (一生<sup>1</sup>①) いつてう(一朝<sup>1</sup>①) うつねん(鬱念<sup>1</sup>、鬱念<sup>2</sup>、<sup>ウツネン</sup>) うんうん(云々<sup>15</sup>⑧) えん(縁<sup>1</sup>①) えんうつ(煙  
 鬱<sup>1</sup>①) おんしやう(恩章<sup>1</sup>①) おんもん(恩問<sup>2</sup>②) かうじん(庚申<sup>2</sup>②) かうみやう(高名<sup>2</sup>①) かんえつ(感悅  
 3①) かんご(閑居<sup>1</sup>①) かんるい(感涙<sup>1</sup>①) きうくつ(窮屈<sup>1</sup>①) きやうびやく(敬白<sup>3</sup>①) きよねん(去年<sup>2</sup>①)  
 きんげん(謹言<sup>58</sup>⑥) きんらい(近來<sup>2</sup>①) くゑめい(貴命<sup>3</sup>②) くゑやうえつ(恐悅<sup>3</sup>①) くゑやうくゑやうきんげ  
 ん(恐々謹言<sup>10</sup>⑤) けいば(競馬<sup>1</sup>②) けんぶつ(見物<sup>1</sup>②) げんめい(嚴命<sup>1</sup>②) こむてう(今朝<sup>1</sup>③) こむねん(今  
 年<sup>8</sup>④) さい(才<sup>1</sup>③) さくじつ(昨日<sup>4</sup>④) じ(事<sup>3</sup>①) しさい(子細<sup>1</sup>②) じぶごにち(十五日<sup>1</sup>②) じふはちに  
 ち(十八日<sup>1</sup>①) じやう(状<sup>1</sup>②) しゆくぐわん(宿願<sup>1</sup>①) しゆんめ(駿馬<sup>1</sup>①) しようくるよう(悚恐<sup>5</sup>①) しょ  
 うぶ(勝負<sup>2</sup>①) しょにん(諸人<sup>1</sup>①) しょぶん(處分<sup>3</sup>①) しんりよく(身力<sup>1</sup>①) すじつ(数日<sup>2</sup>④) すじふ(數  
 十<sup>1</sup>①) せいし(制止<sup>1</sup>①) ぜんか(禪下<sup>2</sup>⑦) ぜんご(前後<sup>1</sup>①) ぜんさつ(禪札<sup>1</sup>①) せんにち(先日<sup>2</sup>①) せん  
 ねん(先年<sup>1</sup>①) そう(僧<sup>1</sup>②) だいし(大師<sup>2</sup>①) たうらい(到來<sup>3</sup>①) だうり(道理<sup>1</sup>②) たじ(他事<sup>2</sup>①) たね  
 ん(多年<sup>1</sup>②) ち(地<sup>1</sup>①) てい(躰<sup>1</sup>①) どうしむ(同心<sup>1</sup>①) なん(難<sup>1</sup>②) にぐわつ(二月<sup>1</sup>②) にひき(二疋  
 1①) はいえつ(拝謁<sup>1</sup>②) ばんじ(万事<sup>1</sup>②) びりよく(微力<sup>1</sup>②) びんぎ(便宜<sup>1</sup>①) ふしん(不審<sup>1</sup>①) ふせん  
 きんげん(不宣謹言<sup>6</sup>) ふびきんげん(不備謹言<sup>4</sup>) ふもん(風聞<sup>1</sup>、<sup>フワン</sup>風聞<sup>1</sup>) へいしん(弊身<sup>1</sup>①) ほんくわ<sup>2</sup>

い (本懐<sup>1</sup>②) むしむ (无心<sup>2</sup>、無心<sup>1</sup>) めんでん (面展<sup>2</sup>①) やく (役<sup>2</sup>①) ようい (用意<sup>1</sup>③) よにん (余人<sup>1</sup>)  
らいぐまつ (来月<sup>1</sup>①) らうねん (老年<sup>1</sup>①) らうもう (老耄<sup>1</sup>①) りんぜき (惋惜<sup>3</sup>②) るい (類<sup>1</sup>①) れうえん (遠  
遠<sup>1</sup>①) ろくぐわつ (六月<sup>1</sup>②) ゐきよく (委曲<sup>1</sup>⑥)

(二) 動詞 一二四語

○和語 一〇七語

あぐ (上<sup>2</sup>、扛<sup>1</sup>) あたふ (能<sup>4</sup>①) あふ (遇<sup>2</sup>①、逢<sup>2</sup>) あぶぐ (仰<sup>2</sup>①) あり (有<sup>47</sup>④、在<sup>17</sup>⑥) いたす (致<sup>9</sup>⑥)  
いたる (至<sup>13</sup>③) いづ (出<sup>1</sup>②) いふ (云<sup>4</sup>⑦、謂<sup>2</sup>⑤) いる (入<sup>1</sup>⑤) う (得<sup>5</sup>②) うけたまはる (承<sup>15</sup>⑤、奉<sup>5</sup>②) う  
ごかす (動<sup>1</sup>①) えらぶ (撰<sup>1</sup>、擇<sup>2</sup>) おく (置<sup>1</sup>①、閣<sup>3</sup>) おこたる (怠<sup>1</sup>、懈<sup>1</sup>) おす (推<sup>1</sup>①) おそる (恐<sup>2</sup>②)  
悚戦<sup>2</sup>、怖<sup>1</sup> おつ (落<sup>1</sup>②) おどろかす (驚<sup>1</sup>②) おどろく (驚<sup>3</sup>③) おはす (坐<sup>6</sup>①、候<sup>1</sup>) おふ (追<sup>3</sup>①、逐<sup>2</sup>)  
おもふ (思<sup>3</sup>①、懷<sup>1</sup>、欲<sup>14</sup>④、想<sup>1</sup>、憶<sup>1</sup>) およぶ (及<sup>6</sup>②、單<sup>1</sup>) かす (借<sup>6</sup>①) かなふ (叶<sup>2</sup>①、合<sup>3</sup>、協<sup>4</sup>) かぶ  
る (蒙<sup>7</sup>⑩、被<sup>1</sup>) かへる (還<sup>1</sup>①、返<sup>1</sup>) きく (聞<sup>2</sup>④) きたる (来<sup>8</sup>①) きはむ (窮<sup>1</sup>、究<sup>2</sup>) くだす (下  
<sup>3</sup>①、授<sup>1</sup>) くだる (下<sup>2</sup>①、降<sup>2</sup>) くはだつ (企<sup>2</sup>③) くはふ (加<sup>5</sup>⑦) このむ (好<sup>2</sup>④、嘉<sup>1</sup>) こふ (乞<sup>1</sup>③、請<sup>3</sup>)  
さぶらふ (候<sup>3</sup>⑤) しく (如<sup>1</sup>①) したがふ (隨<sup>8</sup>④、從<sup>2</sup>) しむ (占<sup>1</sup>③) しめす (示<sup>2</sup>⑥) しりぞく (退<sup>1</sup>②、屏<sup>1</sup>)  
しる (知<sup>12</sup>⑦) す (為<sup>16</sup>③、欲<sup>2</sup>⑩、將<sup>2</sup>) すつ (弃<sup>2</sup>、舍<sup>1</sup>、捨<sup>2</sup>) そなふ (備<sup>1</sup>②) そむく (背<sup>2</sup>①、乖<sup>2</sup>) たくは  
ふ (蓄<sup>1</sup>②) たださはる (携<sup>1</sup>③) たづぬ (尋<sup>1</sup>①) たてまつる (奉<sup>17</sup>②、進<sup>2</sup>) たふ (堪<sup>4</sup>③) たまふ (給<sup>18</sup>⑩、賜<sup>14</sup>)  
たゆ (絶<sup>2</sup>②) たる (垂<sup>6</sup>⑤、低<sup>1</sup>) つかはす (遣<sup>2</sup>①) つく (着<sup>1</sup>、就<sup>2</sup>) つく (盡<sup>3</sup>②、竭<sup>1</sup>) つぐ (次<sup>1</sup>、繼<sup>1</sup>、  
垂<sup>1</sup>) つくす (盡<sup>3</sup>①、悉<sup>2</sup>①、竭<sup>2</sup>) つくる (作<sup>5</sup>①、造<sup>1</sup>①) つつしむ (謹<sup>11</sup>①、慎<sup>1</sup>①) つとむ (任<sup>1</sup>、勤<sup>2</sup>) とぐ (遂  
<sup>7</sup>④) なぐ (投<sup>1</sup>①、抛<sup>1</sup>) なす (為<sup>3</sup>⑦、生<sup>1</sup>) なす (成<sup>4</sup>⑦) なる (似<sup>5</sup>④) のこす (残<sup>2</sup>①、遺<sup>1</sup>) のこる (残  
<sup>1</sup>①) のぞむ (望<sup>3</sup>⑥) のぞむ (臨<sup>3</sup>④) のる (乘<sup>2</sup>②) はげます (励<sup>1</sup>④) はじまる (始<sup>1</sup>①) はしむ (始<sup>4</sup>①) は

す(馳<sup>①</sup>) はづ(辱<sup>②</sup>、恥<sup>①</sup>) はらふ(拂<sup>①</sup>) ひく(引<sup>②</sup>、奪<sup>①</sup>、曳<sup>①</sup>、控<sup>①</sup>) ひぎまじく(跪<sup>③</sup>) ひらく(開<sup>③</sup>)  
 披<sup>②</sup> ふ(経<sup>⑤</sup>、歴<sup>①</sup>) ふす(伏<sup>⑥</sup>、俯<sup>③</sup>、臥<sup>①</sup>) ふる(舐<sup>①</sup>) へだつ(隔<sup>②</sup>) ほどこす(施<sup>①</sup>) ま  
 うく(儲<sup>②</sup>) まうす(申<sup>④</sup>) まかりむかふ(罷向<sup>②</sup>) まぐ(狂<sup>⑤</sup>) まねく(招<sup>⑥</sup>) みる(見<sup>④</sup>、観<sup>②</sup>) む  
 かふ(向<sup>⑤</sup>、对<sup>②</sup>) めしつかふ(召仕<sup>①</sup>) めす(召<sup>③</sup>) もよほす(催<sup>⑤</sup>) もらす(漏<sup>①</sup>、洩<sup>①</sup>) ゆるす(免<sup>②</sup>、  
 聴<sup>②</sup>) よる(寄<sup>①</sup>、倚<sup>①</sup>) よる(依<sup>②</sup>、因<sup>②</sup>) わかつ(分<sup>②</sup>) わきまふ(弁<sup>④</sup>) わする(忘<sup>④</sup>) をはる(了<sup>①</sup>、  
 畢<sup>④</sup>、訖<sup>②</sup>)

## ○漢語 一七語

あんず(案<sup>①</sup>) けいす(啓<sup>⑥</sup>) ごす(期<sup>⑤</sup>) さつす(察<sup>①</sup>) さんず(散<sup>①</sup>) しようす(称<sup>③</sup>) しよす(處<sup>③</sup>)  
 ④ しんず(進<sup>①</sup>) ずいじんす(隨身<sup>③</sup>) そんす(存<sup>③</sup>) たつす(達<sup>①</sup>) ひす(秘<sup>①</sup>) ひろうす(披露<sup>①</sup>)  
 へんず(返<sup>③</sup>) めいず(命<sup>④</sup>) ろんず(論<sup>⑦</sup>) るす(違<sup>①</sup>)

## (三) 形容詞 一六語

あひおなじ(相同<sup>①</sup>) おなじ(同<sup>③</sup>) おほし(多<sup>④</sup>) かくのごとし(如此<sup>⑤</sup>) かたし(難<sup>⑦</sup>、叵<sup>③</sup>) きはま  
 りなし(無極<sup>②</sup>、无極<sup>④</sup>) くらし(暗<sup>①</sup>) しかるべし(可然<sup>①</sup>) ながし(永<sup>②</sup>、長<sup>①</sup>) なかれ(勿<sup>①</sup>、莫<sup>③</sup>) な  
 し(無<sup>⑩</sup>、无<sup>③</sup>) はなはだし(甚<sup>⑦</sup>) はやし(早<sup>④</sup>、駿<sup>①</sup>) ひさし(久<sup>⑦</sup>) ふかし(深<sup>⑧</sup>) むなし(空<sup>③</sup>、虚<sup>①</sup>)

## (四) 形容動詞 六語

ことなり(異<sup>④</sup>、殊<sup>①</sup>) しきりなり(頻<sup>⑦</sup>) しづかなり(静<sup>①</sup>) すみやかなり(速<sup>②</sup>、早<sup>①</sup>) つぶさなり(具<sup>③</sup>) ま  
 れなり(希<sup>②</sup>、稀<sup>①</sup>)

## (五) 副詞 五二語

## ○和語 五一語

あたかも(宛<sup>1②</sup>) あながちに(強<sup>1①</sup>) あに(豈<sup>3③</sup>) あまねく(普<sup>1</sup>、洽<sup>①</sup>) あらかじめ(豫<sup>1①</sup>) あるいは(或<sup>8⑫</sup>)  
 いかん(如何<sup>16①</sup>、何<sup>2</sup>) いはく(云<sup>5③</sup>、言<sup>1</sup>、曰<sup>①</sup>) いはむや(況<sup>3②</sup>、況哉<sup>1</sup>、況乎<sup>①</sup>、矧<sup>①</sup>) いまだ(未<sup>11⑮</sup>)  
 いよいよ(彌<sup>6②</sup>) おのおの(各<sup>3⑤</sup>) かさねて(重<sup>3①</sup>) かつは(且<sup>9②</sup>) かならず(必<sup>9③</sup>) かねて(兼<sup>3①</sup>)  
 かれこれ(彼是<sup>1</sup>、彼此<sup>②</sup>) ことさら(に) (コトサラニ<sup>1</sup>、コトサラ<sup>1</sup>) ことに(殊<sup>19⑥</sup>) さだめて(定<sup>8⑥</sup>) さらに(更<sup>18⑯</sup>)  
 しかしながら(併<sup>4④</sup>) しばしば(屢<sup>1⑥</sup>) しばらく(暫<sup>4④</sup>、暫<sup>1</sup>) すこぶる(頗<sup>6⑤</sup>) すでに(已<sup>16⑱</sup>、既<sup>1④</sup>)  
 すなわち(則<sup>9⑩</sup>、即<sup>6⑤</sup>、載<sup>①</sup>) たしかに(慥<sup>1</sup>、慥<sup>①</sup>) ただ(只<sup>10⑥</sup>、但<sup>1</sup>、唯<sup>①</sup>、啻<sup>①</sup>) ただし(但<sup>16⑮</sup>) たどひ  
 (縦<sup>5⑨</sup>) ともに(共<sup>1⑥</sup>) なかんづくに(就中<sup>2⑥</sup>) なほ(猶<sup>3⑬</sup>) なまじひに(愍<sup>1④</sup>) なんぞ(何<sup>8⑦</sup>、盍<sup>①</sup>) は  
 なはだ(甚<sup>7④</sup>) ひとへに(偏<sup>1⑦</sup>) まことに(寔<sup>2①</sup>、誠<sup>2①</sup>、良<sup>1</sup>、実<sup>②</sup>) まさに(方<sup>2②</sup>、将<sup>4</sup>) また(又<sup>4②</sup>、也<sup>1</sup>、復<sup>①</sup>)  
 まず(先<sup>3⑦</sup>) みな(皆<sup>3⑦</sup>) もし(若<sup>23⑦</sup>) もとも(尤<sup>18⑭</sup>、寂<sup>6①</sup>、最<sup>2</sup>) もはら(専<sup>5④</sup>) やうやく  
 (に) (漸<sup>ヤウヤク<sup>2③</sup>、ヤウヤクニ<sup>①</sup>、ヤウヤクニ<sup>①</sup></sup>) 徐<sup>①</sup> ややもすれば(動<sup>1④</sup>、良<sup>1</sup>) よく(能<sup>1②</sup>、善<sup>①</sup>) よろしく(宜<sup>7⑦</sup>) わ  
 づかに(纔<sup>7④</sup>)

○漢語 一語

せうせう(少々<sup>1③</sup>)

六 連体詞 六語

ある(或<sup>2②</sup>) いはゆる(所謂<sup>1①</sup>) かの(彼<sup>26⑬</sup>) きたる(来<sup>1⑤</sup>) この(之<sup>5</sup>、此<sup>11⑩</sup>、斯<sup>①</sup>) その(其<sup>36⑳</sup>)

七 接続詞 六語

しかのみならず(加之<sup>3③</sup>、加以<sup>①</sup>) しかるあひだ(然間<sup>1⑧</sup>、而間<sup>2</sup>、而際<sup>1</sup>) しかるに(而<sup>12⑥</sup>、然<sup>1</sup>) そもそも(抑<sup>24⑮</sup>)  
 また(又<sup>13④</sup>) よりて(仍<sup>21④</sup>)

右の共通語彙三七七語について、まず、和語と漢語との比率を、品詞に分けてまとめると表Vになる。全体から見ると、七割以上は和語であつて、漢語は名詞に集中している。漢語を多用する文献であつても、共通語彙は、大多数が和語で占められている。

次に、共通語彙の品詞別比率をまとめると、表VIになる。

全異なり語数での共通語彙の比率は、高山寺本古往来では二三%、垂髪往来では二二%である。一〇語中、二語強が共通語彙ということになる。延べ語数では、高山寺本古往来で五二%、垂髪往来で四五%と、半数前後を共通語が占める。一語当りの使用頻度を、共通語彙と非共通語彙とで比べると、高山寺本古往来では、共通語彙が五・二回であるのに対して、非共通語彙は一・五回、垂髪往来の場合は、三・八回対一・三回であつて、共通語彙は使用頻度の高い語であることが知られる。

高山寺本古往来と垂髪往来とは、既に見た如く、品詞別語彙量がよく通ずるものゆえ、品詞毎の共通語彙の比率も、自ら、似た値を示すが、共通語彙の占める比率が高い品詞は、連体詞・接続詞・副詞・形容詞で、名詞・形容動詞は大変低く、動詞は、その中間に位置する。古往来に於ては、連体詞・接続詞・副詞及び形容詞といった品詞では、用いられる語が固定的であると言ひ得るのである。これらの品詞の語性から言ひ換えるならば、表現主体の判断の叙述の形式が固定的であると言えよう。

一般に、二文獻の共通語彙の量は、全語彙量の多少と相関性があるが、その目で見ると、形容動詞に於ける共通語彙の比率の低さが注意される。垂髪往来について見ると、異なり語数では形容詞とほぼ同数であるのに、形容詞の六二%に対して、形容動

表V

	和語	漢語	計
名詞	79(47.3)	88(52.7)	167(100)
動詞	107(86.2)	17(13.7)	124(100)
形容動詞	6(100)	0	6(100)
副詞	51(98.0)	1(2.0)	52(100)
その他	28	—	28
計	271(71.9)	106(28.1)	377(100)

注。( )は%。



表 VI

品詞 \ 語数		異なり語数				延べ語数			
		共通語	非共通語	計	共通語 の比率	共通語	非共通語	計	共通語 の比率
高山寺本古往来	名詞	167	901	1,068	15.6	729	1,294	2,023	36.0
	動詞	124	263	387	32.1	604	420	1,024	59.0
	形容詞	16	16	32	50	123	27	150	81.5
	形容動詞	6	31	37	16.2	11	46	57	19.3
	副詞	52	22	74	70.3	328	36	364	90.1
	連体詞	6	5	11	54.5	82	12	94	87.2
	接統詞	6	6	12	50	78	11	89	87.6
	感動詞	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	377	1,244	1,621	23.3	1,956	1,845	3,801	51.5
垂髮往来	名詞	167	1,037	1,204	13.8	492	1,338	1,830	26.9
	動詞	124	230	354	35.0	459	301	760	60.4
	形容詞	16	10	26	61.5	89	16	105	84.8
	形容動詞	6	23	29	20.7	18	27	45	40
	副詞	52	32	84	61.9	258	84	342	75.4
	連体詞	6	0	6	100	65	0	65	100
	接統詞	6	0	6	100	42	0	42	100
	感動詞	0	1	1	0	0	0	1	0
	計	377	1,333	1,710	22.0	1,423	1,767	3,190	44.6

詞は僅か二一%であつて、名詞の一四%に近い。これは、形容動詞が、名詞に次いで漢語使用率が高く、和語の少ない品詞であるためである。

## 七、おわりに

高山寺本古往来と垂髮往来の語彙を比較すると、共通する面と相違する面とがある。本稿では、専ら共通性に視点を置いたため、差異性については殆んど触れ得なかつた。稿を改めて考察したい。

古往来の語彙構造の特徴は、計量的方法によつても明らかにし得るけれども、語の意義を抜きにしては、その本質は迫り得ない。語の意義による分類と、本稿で得られた結果とを重ね合わせることによつて、初めて、その全体像が明らかになるであろう。本稿は、そのための最も基礎的な作業である。

## 注

- (1) 『古往来についての研究<sup>上世・中世における</sup>』(昭和二四年)。
- (2) 『雲州往来享祿本 研究と総索引 本文・研究篇』(昭和五七年) 第三章。
- (3) 「国語史料としての高山寺本古往来」(前掲『高山寺本古往来 表白集』) 五一二頁以下。
- (4) 小林芳規博士<sup>平安鎌倉時代に於ける</sup>『漢籍訓読の国語史的研究』(昭和四二年) 三五六頁。
- (5) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(昭和三八) 三四四頁以下。
- (6) 「基本語彙に関する二三の研究——日本の古典文学作品に於ける——」(『国語学』二四輯 昭和三一)。
- (7) 注(3)論文。

〈付記〉 本稿は第十回鎌倉時代語研究集会(昭和六十年八月十二日)で口頭発表したものに基いている。席上、御指導を賜つた小

林芳規先生に、厚くお礼申し上げます。